

はじめに——文化産業としての短編映像

第一章 教育映画・文化映画・ドキュメンタリー映画——十五年戦争の終わりまで……………001

- 1 意図された「短編」の始まり——教育映画市場の形成……………003
- 2 科学の普及と視覚メディアの役割——出版と映画……………016
- 3 戦時短編の思想——映画法と文化映画ブームの帰結……………031
- 4 「ドキュメンタリー映画」のパラドックス……………058
- 5 国策「文化映画」の終焉……………070

第二章 占領下の民主化と短編映像——文化映画から新しい教育映画へ……………079

- 1 占領政策と映画——統制撤廃と新しい規制……………081
- 2 戦後短編映画業界の形成——経験者たちと新しいプレイヤーの出会い……………097
- 3 戦後労働運動と短編映画業界……………118

第三章 「教育映画」からの再出発——製作者の期待・教育界の見かた……………125

- 1 「教育映画」という曖昧な概念……………127
- 2 学校教育における「教育映画」の生産・供給システムの形成……………143

- 3 社会教育分野の「教育映画」……………163
- 4 産業としての「教育映画」——業界・行政・政治……………177

#### 第四章 新分野「産業映画」の盛衰——発注者と製作者の曖昧な関係……………187

- 1 委託製作の戦後初期——「PR映画」の登場……………189
- 2 「PR映画」の発展と大衆化の試み……………212
- 3 多様化した「産業映画」とその評価——選奨制度の展開……………219
- 4 「産業映画」時代以後の委託製作——映像メディアの多様化のなかで……………264
- 5 「産業映画」時代が提起した課題(1)——東京シネマ・岡田桑三における委託作品と製作者の権利……………280
- 6 「産業映画」時代が提起した課題(2)——桜映画社・村山英治における委託作品と経営の持続性……………294

#### 第五章 科学・民主主義・映像メディア——見えなくなる先端と日常の視線……………313

- 1 戦後科学映画の形成……………315
- 2 高度成長の一九五〇～六〇年代——科学映像が映す時代の動き(1)……………352
- 3 疑問と不安の一九七〇～八〇年代——科学映像が映す時代の動き(2)……………369
- 4 体制化とメディア革命の九〇年代から——科学映像が映す時代の動き(3)……………403
- 5 日常の視線で先端を見る——科学映像製作者の課題……………453

## 第六章

「短編」を越えて——製作者たちの模索する未来……………453

1 短編委託製作の難しさ——岩波映画・吉野馨治の志と現実……………455

2 運動から生まれる可能性を求めて——青林舎・高木隆太郎の闘い……………482

3 インデペンデント長編ドキュメンタリーの時代へ——映画祭が拓く新しい市場……………493

4 新世代プロデューサーたちが探る未来……………505

5 共同記憶としての映像記録——大震災とアーカイブと……………514

あごがき——経緯・謝辞・期待……………521